

定年退職される3人の先生からのメッセージ

学生からもらった「熱い」思いを胸に

商学部教授 殿村 晋一(とのむらしんいち)

問題意識の涵養を

専修大学に42年間奉職し、いま定年退職のときをむかえた。まさに感無量である。

さて、定年の老兵から現役の学生諸君へのメッセージ、という編集部からの注文である。

私はかつて商学部の学部長就任に当たって学生諸君に「10年単位の体内時計を持ちなさい」と呼びかけたことがあった。その真意は、物事は10年単位で取り組まないと本物にはなりません、と言いたかったのである。頑固一徹に物事に取り組む。これが力を生む。



今回は、世の中の「変化」を敏感に感じ取る能力を養え、ということをつけ加えたい。新聞報道を見る限り、中東において民主主義や自由という言葉がネガティブな響きを持つように仕向けたアメリカは超大国の地位を退き、EUやBRICsの台頭がめざましい。なかでもブラジルは米欧依存を脱却し、同国史上初めて債務国から債権国に転換した。また、かつての「欧州最貧国のアイルランド」が外資と移民の導入により急成長している。このような変化はいずれアフリカにも及んでいけよう。新しい動きの芽は、最初は小さい。しかし必ず大きくなる。諸君、新聞を丹念に読もう。問題意識の涵養(かんよう)は新聞からです。(在職42年。主な担当は商業史)

文学部教授 鈴木 丹士郎(すずき たんじろう)

批判する学生にほくそえんだ!

授業は、結果はどうであれ、どれだけ問題と真剣に取り組んで勉強するかを重視したので、怠けたり学習に身が入らない学生はよく叱(しか)った。ついに怒ったことも度々(たびたび)あった。しかし私の真意を次第に理解して皆よくついてきてくれたし、時には私の考えを批判する学生も出てきた。「これはしめたり」とほくそえんだものだ。

基礎がしっかり身につくように導けば、後はあまりいじらないで学生を信用することが一番いいと考えてきた。研究・教育への熱い思いを持ち続けてこられたのは、このような考え方にさせてくれた学生あってのことである。大学院の教育も学部と基本的に変わるものでない。学問に王道なし、能動的な演練の場では力量が試されるので、こちららも必死である。これは論文作成においても然(しか)り、人真似(まね)はもつての外、小器用にまとめるのも拒否。以上のことは私自身の自戒の言葉でもある。



▲笑顔の最終講義(生田キャンパスで)

多くの優れた先輩や、よき同僚の教員職員の方々に恵まれ、また多くの個性豊かな学生たちに出会うことのできた倖(しあわせ)を今しみじみと味わっている。(在職43年。主な担当は日本語の歴史)

法科大学院教授 齊藤 博(さいとう ひろし)

出会いに恵まれた“第三楽章”

人生をシンフォニーに譬(たと)えれば、私の専修大学での生活はさしずめ第三楽章と

いえようか。さほど長い楽章ではないが、そこにはアンダンテありプレストありといった、起伏に富む時間があった。

法学部においても多くの出会いがあったが、紙幅の関係もあり、法科大学院に絞って述べよう。教員側では私が法科大学院の第1期生となる。法科大学院という、わが国司法改革の大きな実験に参画でき、学生の真剣な眼差(まなざ)しに接したこと、その学生は、街で会っても積極的に挨拶をするし、エレベーターの乗り方ひとつにも礼儀作法を心得ていた。学生と教員との壁も感じられなかった。本学法科大学院で勉強した者が法曹として活躍する様を見るのが楽しみだ。

それに、中央大学、鹿児島大学と共同で知的財産法に関する映像教材の開発を行い、100枚近いDVDの作成に関与することができたことも、懐かしく思い出される。(在職10年。主な担当は知的財産法〔著作権法〕)



「人文研」公開講座“旅”第2回

柘植教授—作家・遠藤周作の足跡たどる 大谷教授—ロシア軍人が眠る日本の墓地

人文科学研究所の40周年を記念する公開講座「旅—人間はどんな旅をしてきたか」の第2回が3月1日、神田キャンパスで開催された。現代文学の柘植光彦文学部教授と日本近代史の大谷正法文学部教授が講演、聴衆200人が聞き入った。

柘植教授は『沈黙』『海と毒薬』『深い河』の遠藤周作に焦点を当てた。死後12年になる遠藤はカトリック信者として知られるが、「どのような宗教であれ、その根底にある思想は一緒であり、それは人間だれもが持ち合わせている無意識の中に存在する」という多元的宗教観を持っていた。

遠藤が旅したフランス、長崎、自らの宗教観の“到達点”としたヒンドゥー教のメッカ・インドを、生い立ちや関連する作品と共にたどった。

大谷教授は、「未発の世界大戦」と言われる日露戦争で死亡したロシア軍人が眠る日本各地の墓を訪ねた様子を語った。死体の埋葬法や「追悼」を見ることで、そこに示される政治的性格や日本人の思想を浮き彫りにした。 ▲会場からの質問に答える壇上の大谷教授



▲講演する柘植教授



同公開講座は、今後も連続で3回開催され、「旅」と人間とのさまざまなかかわりを探る。

第3回は、4月26日(土)15時から神田キャンパスで開催される。演題と講師は(1)「李白と杜甫—二つの極端な旅の姿」(松原朗文学部教授)(2)中世の世界を求めて—薩南の喜界島からハーメルンへ—(亀井明德文学部教授)。

言語・文化研究センター

ボッカチオの『テセイデ公』 原典講読会開く

プロジェクト「Anglo-Saxon語の継承と変容」を展開中の社会知性開発研究センター／言語・文化研究センター（松下知紀センター代表）は、「ボッカチオの『テセイデ公』（原典）講読会」を、3月1日、神田キャンパスで開催、約20人が参加した。講師は同センター客員研究員の福島治東京女子大学教授。



「たまフォーラム」で徳田ゼミが発表

地域活性化のために

住民、企業、大学と行政が連携して、多摩区の活性化を目指す「たまフォーラム」での活動を報告する「たまフォーラム 発 川崎を元気にするコミュニティビジネス！」が2月28日、多摩区役所で開かれ、コミュニティビジネスや育児支援カフェ、地域通貨流通の実験報告などが行われた。

本学からは、空き店舗を利用し、長沢商店会の活性化に協力した経済学部・徳田賢二ゼミの代表・田中康央さん(3年次)が、1月末に行ったイベントを中心に報告。「理論だけでなく、実際に動くことの大変さを経験できた。新年度も継続し、ビジネスをさらに意識した『(株)徳田ゼミ』として他の事業者とも連携して、積極的に活動していきたい」と抱負を語った。

徳田教授は、「課題を乗り越える難しさを学生たちは体感したと思う。今後も大学としてコミュニティビジネスにかかわり、学生を接点に地域活性化を図っていきたい」と述べた＝写真。



《専修人の新しい本》

長安都市文化と 朝鮮・日本

李浩・矢野 建一 主編

張弘・土屋 昌明 編

本書は、平成16年8月27日に西安の西北大学でおこなった共同討論会の成果（中国語）。ほぼ同じ内容の日本語の論文集『長安都市文化と朝鮮・日本』が、同時に日本の汲古書院から出版されている。



日本側執筆者は全員、本学の教員と卒業生、中国側は西北大学と西安市内の大学の教員。国際交流協定大学との学術交流で、その成果の論文集が両国同時に、両国語で刊行されたのは珍しい。日本側論文を中国語に翻訳するのが並々ならぬ苦勞だったことも特記しておく。平成15年以来、数度にわたる両大学の共同研究については、汲古書院の論文集の「あとがき」をご覧いただきたい。（経済学部教授・土屋昌明）

政治の約束

ハンナ・アレント 著

高橋 勇夫 訳

人間はすべて世界に生まれ落ちてくる、ただそれだけの理由によって、自分自身がひとつの新しい始まりなのである。



哲学が政治を抑圧してきた政治思想史の終わりを語り、絶滅戦争が現実化する時代に、新しい政治の始まりを展望する約束の書。

主著『全体主義の起原』以降、原理的思考に転じたハンナ・アレントの政治哲学の粋を網羅する。幻の『政治入門』が、最良の編集を得てついに実現。

秩序形成を志向する政治学の常識を転倒して、「政治の意味は自由である」と高らかに謳いあげる。政治学というジャンルを超えて、人間の真の在り方が問われている。（筑摩書房・本体3000円＋税）

訳者（たかはし・いさお）＝法学部准教授。担当は英語。